

[原 著]

国際スポーツイベント観戦者の基礎的特性に関する研究 —五つのイベントを事例として—

佐野 昌行

(2006年10月30日受付, 2007年1月24日受理)

A Study on the Basic Characteristics of International Sporting Event Spectators

—Taking 5 Events as Actual Cases—

Masayuki SANO

As interest in spectator sports has risen in recent years, various types of research have been conducted in the field of sports marketing, and basic data has been accumulated relating to spectators of sporting events. However, no research has yet been done to gather basic data focusing on international sporting events.

Thus, in this research, questionnaire surveys focusing on 5 sporting events held within Japan in 2005 were conducted while adopting the perspective of sports promotion, and looking at the development of marketing strategies for sporting events to bring in large numbers of spectators. On this basis, the paper discusses the basic attributes of the spectators of each event, their relationships with the sport, and their spectator behavior. The purpose was to obtain basic materials relating to spectators of international sporting events.

As a result, basic materials relating to spectators of international sporting events are obtained. By comparing these results from the view of marketing strategies for sporting events, it seems that the features of spectators are understood and differentiate or classify events become possible by discussing about the characteristics of spectators based on followings.

- 1) Sex, age and the experience playing the same sports as watching.
- 2) The experience of playing and watching the same sports as watching.
- 3) Interests in playing and watching sports.

Key words: Sports event, Sports management, Sports marketing, Spectator

キーワード: スポーツイベント, スポーツマネジメント, スポーツマーケティング, 観戦者

1. 目 的

近年, 各種メディアの急速な発達に伴い, 日本でもアメリカのメジャーリーグやヨーロッパ各国のサッカーリーグ等に代表されるハイレベルなスポーツの観戦が人気を集めている。また国内ではプロ野球やJリーグのみならず, バレーボールや格闘技, プロゴルフといったさまざまなスポーツが, 人気選手の登場とともに話題にのぼることが多くなってきた。

このような「みるスポーツ」¹⁾への関心の高まりを受け, 国内ではこれまでにスポーツマーケティングの分野においてさまざまな研究が行われ, スポーツイベ

ントの観戦者を対象とした研究が積み重ねられてきた。藤本ら²⁾, 高橋³⁾による研究では, プロ野球およびJリーグ観戦者について, 観戦回数に影響を及ぼす要因として, チームロイヤルティ, 過去の観戦経験の有無, 情報接触度, 名前を知っている選手の数, 自宅から会場までの時間等があげられることが明らかにされた。また藤本ら⁴⁾, 原田ら⁵⁾, 松岡ら⁶⁾は, プロ野球およびJリーグチームの本拠地の住民を対象とした調査を行い, 地元住民の観戦意図や観戦頻度に影響を与える要因について検討を加えた。その結果, 性別, 年齢, チームロイヤルティ, 情報への接触度や認知度, 観戦

* 日本体育大学スポーツマネジメント研究室

に対する態度、過去の運動・スポーツ経験の有無、現在の運動・スポーツ実施率、チームの地元への貢献に対する期待度、スタジアムまでの時間といった項目が、スタジアムでの観戦意図や観戦頻度に影響を与えていることが明らかとなった。さらに池田ら⁷⁾、川口⁸⁾、斉藤⁹⁾、藤善¹⁰⁾らは、スポーツ観戦者の動機や心理的側面に焦点をあてた分析を行い、スポーツ観戦には、学習、娯楽、応援、ドラマ、カタルシスといった心理的要因が関係していることを示した。さらにこれらの心理的要因が、性別、観戦している競技と同じ競技（以下、同一競技）のプレー経験、競技方法やルールの理解度、イベントの性格等によって異なることが明らかにされた。

またスポーツイベントのマーケティングにおいては今日、観戦者に関する基礎的なデータの積み重ねが必要とされている^{11)~13)}。原田ら¹¹⁾、藤本ら¹²⁾は、スポーツマーケティングに関する基礎的資料を得ることを目的として、女子大生のスポーツ観戦行動と、観戦行動に影響を与える要因に関する研究を行った。その結果、女子大生のスポーツ観戦者と非観戦者との間には、年齢、居住地、ライフスタイル、情報認知度、準拠集団への所属の有無、ファンチームおよびファン選手の有無、過去のスポーツ参加経験等の項目において違いがみられることが明らかとなった。また仲澤ら¹⁴⁾、小野里¹³⁾らは、Jリーグの女性観戦者および女子バスケットボールリーグの観戦者を対象として、年齢、職業、会場までの時間、観戦頻度、同行者数、同一競技以外の観戦スポーツの有無、運動部所属状況、興味・関心のあるスポーツといった、観戦者に関する諸特性を明らかにした。

これらの研究によってこれまでに、さまざまな方面からスポーツイベント観戦者の市場細分化が図られ、マーケティング活動に関する基礎的な情報が蓄積されてきた。またこれらの結果をもとにして、継続的に足を運ぶ観戦者を増加させ、多くの観戦者を確保するためのマーケティング活動の必要性が主張されてきた。しかしながらスポーツイベント観戦者に関する基礎的研究のうち、国際スポーツイベントを対象として基礎的データを集めた研究は、いまだに行われていないのが現状である。また上にあげた先行研究の中には、スポーツイベントの経済的価値に焦点をあてたものが多い。スポーツイベントの運営には経営学的な視点が不可欠であることに異論はないが、松田¹⁵⁾、柳沢¹⁶⁾らが指摘しているように、スポーツイベントについて検討する際には、文化的価値に重点をおいて議論が展開されねばならない。その点に関して国内で開催されている国際スポーツイベントには、多くの人々に観戦におとずれてもらうことで、経済的な面だけでなく、競技

の普及や振興という文化的側面の発展に寄与するとの役割が強く期待されているといえよう。したがって今日、スポーツイベントのマーケティングについて検討するにあたり、国際スポーツイベントを対象として取り上げられる意義は大きいといえる。

そこで本研究では、2005年度中に国内で開催された国際スポーツイベントを対象としてとりあげ、先行研究で用いられてきた観戦者特性を表す項目を用いて各イベントの観戦者の基礎的な属性およびスポーツとのかわり、観戦行動について考察した。本研究は、多くの人々に観戦におとずれてもらうための国際スポーツイベントのマーケティング戦略の開発を視野にいれ、イベントの差別化・類型化を目指し、観戦者に関する基礎的資料を得ることを目的としたものである。

また上述したように、基礎的なデータの積み重ねが必要とされているスポーツマーケティングに関する研究領域において、本研究は国際スポーツイベントを対象とした研究の一つとして位置づけられるものである。

2. 方 法

1) 調査の対象と方法

表1に調査の対象としたイベントおよび調査の概要を示す。本研究では、表1に示した五つの国際スポーツイベントにおいて、会場をおとずれた観戦者を対象として、質問紙調査を実施した。調査対象とするイベントの選定にあたっては、「みるスポーツ」としての仕組みを十分に備えていることと¹⁷⁾、競技自体の普及・振興または発展といった役割を期待されていることを条件とするため¹⁸⁾、日本体育協会および日本オリンピック委員会に加盟している国内の中央競技団体が主催する大会の中から対象を選定した。また本研究は、継続的にイベントへ足を運ぶ観戦者の確保を目指すものであるため、毎年継続的に開催されているスポーツイベントを対象とした。なお以下において、これらの大会の観戦者について検討するにあたり、各大会を表す際に、大会名ではなく競技名を用いるものとする。

質問紙は各会場入り口において、鉛筆とともにすべての観戦者に対して配布され、会場内に設置された回収ボックスを用いて回収された。ただしテニスのイベントでは、大会主催者が質問紙の提出者を対象として抽選会を実施したため、メインスタジアム外の広場に用意された抽選会場において、スタッフが直接受け取るかたちで、質問紙が回収された。

2) 調査項目

上述したスポーツマーケティングに関する先行研究

表1 査対象イベント

| 競技 | 大会名 | 大会期間 | 大会会場 | 調査日 | 配布枚数 | 回収枚数 | 回収率/% |
|--------|--|----------------|--|----------------|--------|--------|-------|
| ハンドボール | 第10回ヒロシマ国際 ハンドボール大会 | 2005年7月22日～24日 | 広島県広島市・東区スポーツセンター | 2005年7月22日～24日 | | 297 | 33.3 |
| ソフトボール | 2005 JAPAN CUP 国際女子ソフトボール大会 | 2005年7月29日～31日 | 神奈川県横浜市・保土ヶ谷公園硬式野球場 神奈川県横浜市・横浜スタジアム | 2005年7月31日 | 2,880 | 884 | 30.7 |
| 卓球 | フォルクスワーゲンオープン・ 萩村杯2005 | 2005年9月22日～25日 | 神奈川県横浜市・横浜文化体育館 | 2005年9月23日～25日 | 4,398 | 1,011 | 23.0 |
| テニス | AIG Japan Open Tennis Championship 2005 | 2005年10月1日～9日 | 東京都江東区・有明コロシアムおよび 有明テニスの森公園 | 2005年10月7日～9日 | 20,156 | 5,355* | 26.6 |
| 柔道 | 2006年嘉納治五郎杯 国際柔道大会 | 2006年1月14日～15日 | 東京都千代田区・日本武道館 | 2006年1月14日～15日 | 3,249 | 728 | 22.4 |

* テニスのイベントについては、回収した質問紙の中から、1,000枚を無作為に抽出して集計を行った。その結果、有効回答数は992であった。

において、これまでにいくつかの項目が観戦者の基礎的特性を示すものとして設定されてきた。本研究ではそれらのうち、観戦行動に影響を与えるとされてきた14項目を、調査項目として設定した(表2)。ただし、同一競技のプレー意向の項目については、ハンドボールおよびテニスのイベントにおける調査では、調査項目として設定することができなかった。

回答の信頼性を確保するため、同一競技のプレー経験については、プレー年数の項目で1年以上と回答した場合のみ、同一競技のプレー経験があるとみなした。さらに観戦している競技と異なる競技(以下、異なる競技)のプレー経験については、プレー経験のある競技と経験年数に関する設問を用意し、いずれかの競技の経験が1年以上であると回答された場合のみ、異なる競技のプレー経験があるとみなした。同様に異なる競技の観戦経験については、3年以内に観戦した経験のある競技と回数に関する設問を用意し、観戦回数が1回以上であると回答された場合のみ、異なる競技の観戦経験があるとみなした。

観戦動機の項目に関しては、スポーツ観戦の動機や観戦によって得られる動機や充足感について検討した先行研究のうち、スポーツイベントの中核部分に焦点を当て、会場での観戦について検討することでスポーツイベントの差別化を図った斉藤⁹⁾の研究を中心とし

て、六つの動機(表2)を用意した。

3) 分析

データの分析において、「同行者数」および「自宅から会場までの時間」の2項目では、一元配置の分散分析によって差の検定を行った後、テューキー・クレーマーのHSD検定による多重比較を行った。その他の項目では、カイ2乗検定を用いて差の検定を行った。

3. 結果および考察

観戦者の基礎的属性およびスポーツとのかかわり、観戦行動についての調査結果は、図1-1~1-14のとおりである。この結果をもとに、以下において、観戦者の基礎的特性について、イベントごとの比較を中心に検討していく。また各イベントについて2項目のクロス集計を実施した結果(図2-1~6-9)をもとにして、イベントごとの観戦者の特徴について、より詳細に考察していく。

1) 基礎的特性の比較

イベントごとに観戦者の基礎的特性を比較し、カイ2乗検定および分散分析による差の検定を行った結果、すべての項目でイベント間に有意差が認められた。

まず性別についてみると、ハンドボールでは男子のみの大会であったにもかかわらず、観戦者数において

表2 調査項目

| 項目 | 水準 |
|-----------------|--|
| 性別 | 男性・女性 |
| 年齢 | 20歳未満・20代・30代・40代・50歳以上 |
| 異なる競技のプレー経験 | あり・なし |
| 異なる競技の観戦経験 | あり・なし |
| 同一競技の国際大会の観戦回数 | 0回・1~2回・3~4回・5~6回・7回以上 |
| 大会に関する情報の入手時期 | 今日・昨日~1週間前・1週間前~1カ月前・1カ月以上前 |
| 同一競技のプレー経験 | あり・なし |
| 同一競技のプレー経験年数 | 1~3年・3~5年・5年以上 |
| 同一競技の今後のプレー意向 | 非常にプレーしたい・少しプレーしたい |
| 同一競技の今後の観戦意向 | 非常に観戦したい・少し観戦したい あまり観戦したくない・まったく観戦したくない |
| 最も強い観戦動機 | 学習(見ることによって自分の技能や知識を高めたい) 選手応援(ある特定の選手を応援したい) 試合結果(どの選手が勝つか、試合の結果が楽しみだ) 鑑賞(選手のスピードや、すばらしい個人技が見たい) ドラマ(スポーツがもつ意外性や、すじ書きのないドラマを楽しみたい) カタルシス(観戦することで、日常生活のストレスや疲れから解放されたい) |
| 最も強い観戦動機に対する満足度 | 非常に満足・少し満足・少し不満・非常に不満 |
| 同行者数 | (人数を記入) |
| 自宅から会場までの時間 | (時間を記入) |

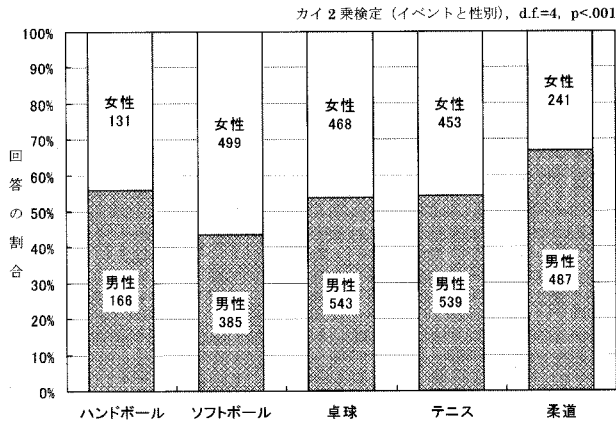


図 1-1 性別

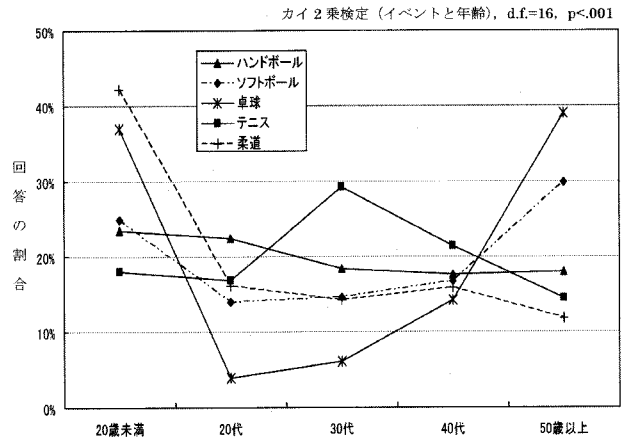


図 1-2 年齢

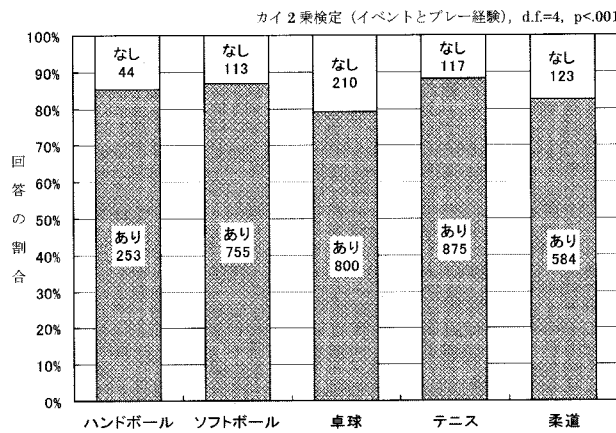


図 1-3 異なる競技のプレー経験

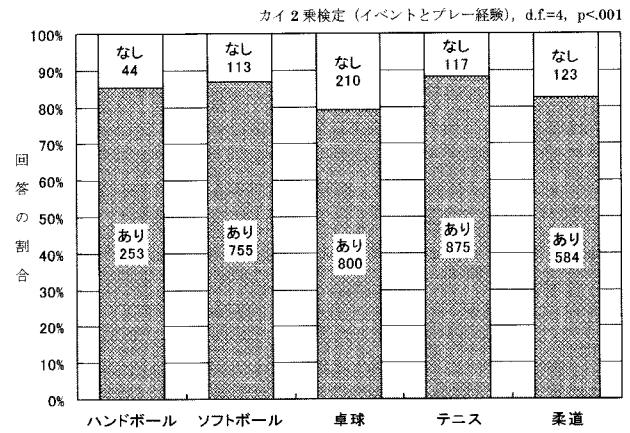


図 1-4 異なる競技の観戦経験

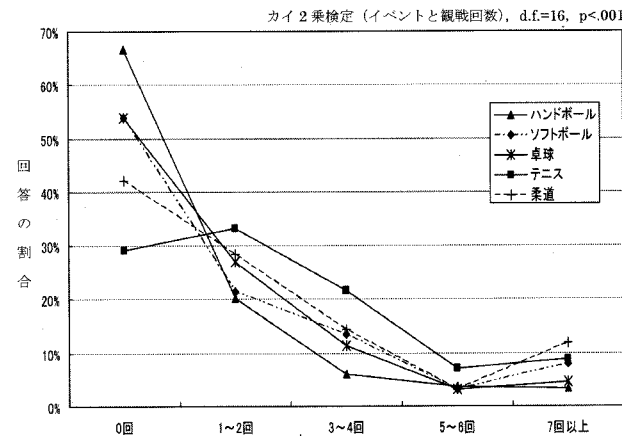


図 1-5 同一競技の観戦回数

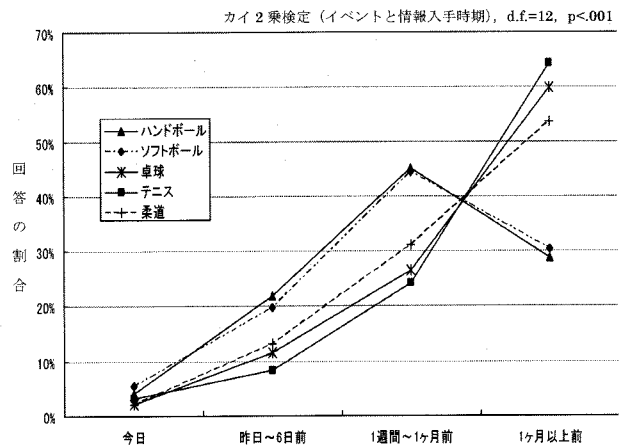


図 1-6 情報入手時期

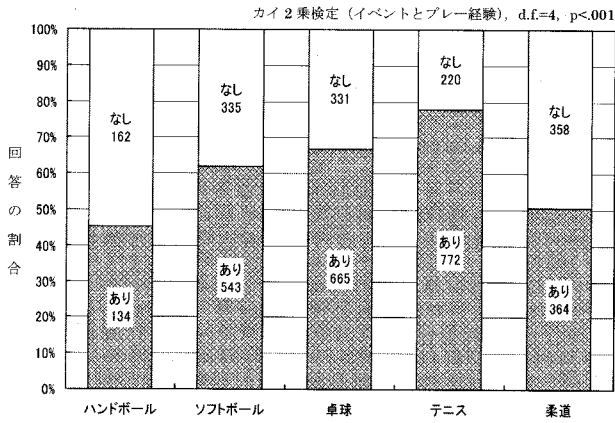


図 1-7 同一競技のプレー経験

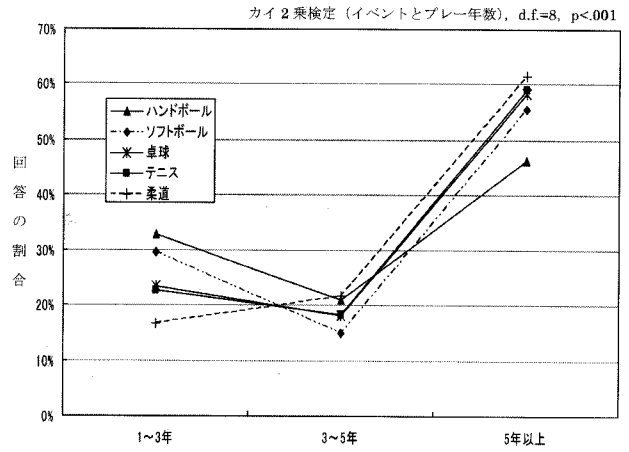


図 1-8 同一競技のプレー年数

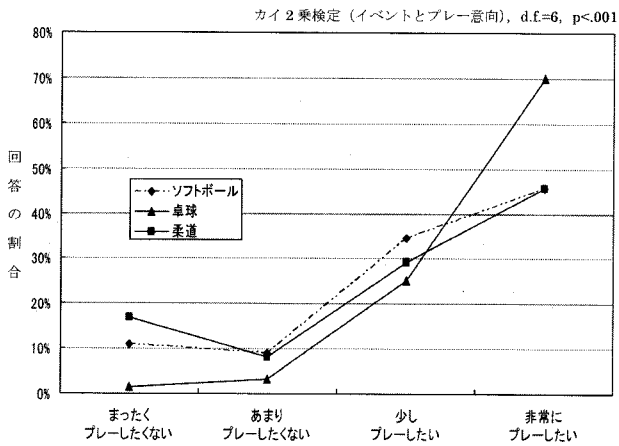


図 1-9 同一競技の今後のプレー意向

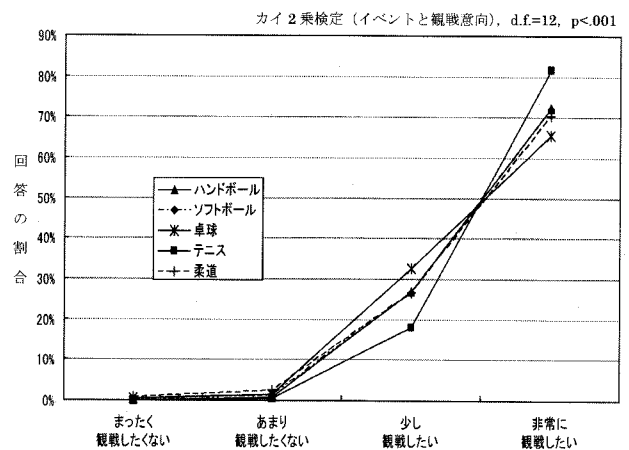


図 1-10 同一競技の今後の観戦意向

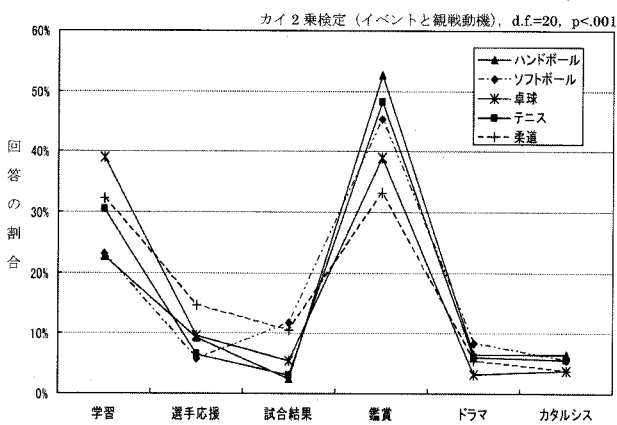


図 1-11 最も強い観戦動機

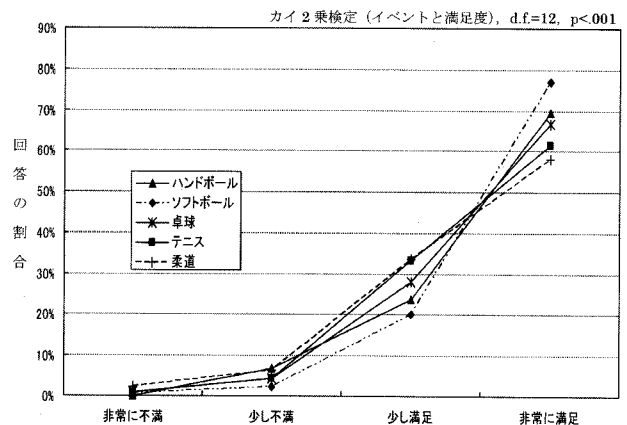


図 1-12 満足度

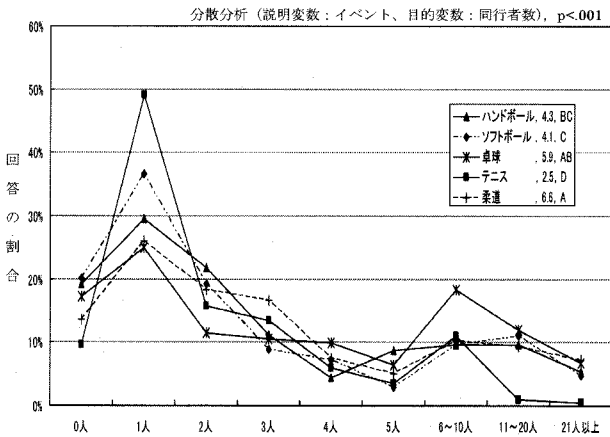


図 1-13 同行者数

凡例内の数字は平均値(人)を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

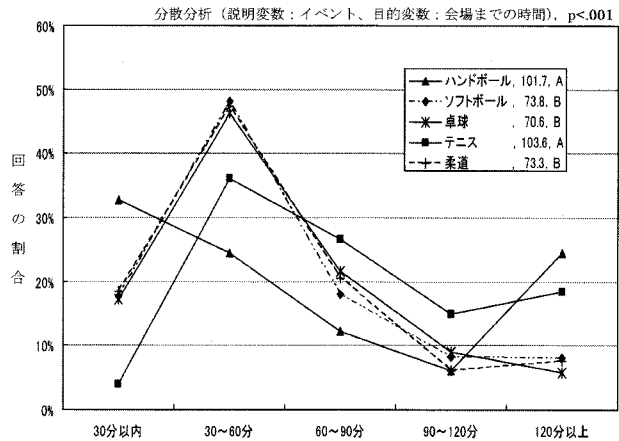


図 1-14 自宅から会場までの時間

凡例内の数字は平均値(分)を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

男女差は大きくなかったが、同様に男子のみの大会であった柔道と女子のみの大会であったソフトボールでは、それぞれ男性、女性の観戦者の割合が、他のイベントと比較すると多いようである(図 1-1)。また男女両方の種目が行われた卓球およびテニスでは、男性が女性よりも多数であった。

年齢の分布に関して、ハンドボールでは各年代が同程度の割合で含まれ、ソフトボールでは20歳未満と50歳以上の割合が高いU字型、卓球ではソフトボールよりもさらに極端なU字型となった(図 1-2)。一方、テニス観戦者の年齢分布は、30代が最も多い山型を示した。柔道では20歳未満の観戦者の割合が5イベント中最も高く、50歳以上の割合が5イベント中最も低かった。

異なる競技のプレー経験および観戦経験について、ソフトボールではプレー経験、観戦経験を有する者の割合がともに高く、特に観戦経験を有する者の割合は、五つのイベントの中で最も高かった(図 1-3, 図 1-4)。このことから、他のイベントと比較するとソフトボール観戦者の中には、「みるスポーツ」全般への興味が高い者が多いといえる。一方、卓球においては、プレー経験および観戦経験を有していない者の割合が最も高かった。したがって調査対象とした卓球イベントの観戦者の多くは、「するスポーツ」と「みるスポーツ」を含めて、スポーツ全般に対する興味が低いと解釈できる。テニスでは、異なる競技のプレー経験を有している者の割合が最も高かったが、異なる競技の観戦経験については、経験があると回答した者の割合が卓球に次いで低かった。このことから、テニスイベント観戦者の特徴のひとつとして、「するスポーツ」全般への関心が高い一方、「みるスポーツ」とのかかわりは少ない者が多いことがあげられよう。

同一競技の国際大会観戦回数に関しては、テニス以外の4イベントにおいて、0回と回答した者の割合が最も高かった(図 1-5)。一方、テニスイベント観戦者で、これまでの観戦回数が0回と回答した者の割合は30%未満であり、このイベントが多くのリピーターを確保しているようすがうかがえる。しかしながら観戦経験が5~6回の者と7回以上の者とを比較したとき、ソフトボールおよび柔道でみられるような、7回以上が5~6回を上回るといった傾向は、テニスではみられなかった。したがって、リピーターの多くが毎年連続して観戦におとずれているとの前提にたつのであれば、テニスイベントでは、最近5~6年間のうちにリピーターを確保するようになったといえる。またハンドボールではにおいて、0回と回答した者の割合が5イベント中最も高く、柔道では7回以上の観戦経験があるとした者の割合が、5イベント中最も高かった。

大会に関する情報の入手時期は、2通りに分かれた(図 1-6)。ハンドボールおよびソフトボールでは、1週間~1カ月前に情報を入手した観戦者が最も多かったが、卓球、テニス、柔道イベントの観戦者中で最も多数であったのは、1カ月以上前に情報を入手した者であった。

同一競技のプレー経験をみると、ハンドボールではプレー経験を有している者の割合が50%未満であった(図 1-7)。ハンドボール以外では、柔道、ソフトボール、卓球、テニスの順にプレー経験者の割合が多くなり、テニスでは観戦者のうち75%以上がプレー経験者であった。

同一競技のプレー年数については、柔道の観戦者のみ、プレー年数が増すにつれて回答の割合も増加し、1~3年との回答の割合が最も低く、5年以上とした者

の割合が最も高かった(図1-8)。柔道以外の四つのイベントでは、1~3年のプレー経験を有する者のほうが、3~5年の者よりも多いとの結果が得られた。

同一競技の今後のプレー意向は、調査を実施した三つのイベントすべてにおいて、プレーしたくないとの回答よりもプレーしたいとの回答が多い傾向にあった(図1-9)。なかでも卓球では、非常にプレーしたいとの強い意向を示した者が多かった。一方ソフトボールおよび柔道では、まったくプレーしたくないと回答した者の割合が、あまりプレーしたくないと回答した者の割合を上回るという結果であった。

同一競技の今後の観戦意向についてみると、五つのイベントすべてにおいて、観戦したくないと回答した者が非常に少なく、多くの観戦者が観戦したいとの意向を示していることが明らかとなった(図1-10)。また5イベントの中ではテニスにおいて、非常に観戦したいとの強い意向を示した者の割合が80%と高かった。

最も強い観戦動機に関しては、すべてのイベントで鑑賞との回答が最も多く、学習が次に多数であるとの結果が得られた(図1-11)。イベントごとにみると、ハンドボールとソフトボールでは学習と回答した者の割合が比較的lowかった。ソフトボールでは、ドラマおよび試合結果の回答の割合が5イベント中最も高かった。ここには、前年に行われたアテネオリンピックにおいて、日本代表チームが銅メダルを獲得するなど、日本代表チームの競技レベルが世界最高水準にあり、今大会においても好成績が期待できるといった背景があるものと考えられる。卓球および柔道では、最も強い動機として学習をあげた者の割合が多く、鑑賞とほぼ同じ割合であった点が特徴的である。これに加え柔道では、選手応援との回答の割合が5イベント中最も高かった。

最も強い動機に対する満足度については、すべてのイベントで非常に不満との回答が最も少なく、満足度が増すにつれて回答数も増加するという傾向がみられた(図1-12)。今後の観戦意向の項目において、テニスは強い意向を示した者の割合が最も多く、卓球は強い意向を示した者の割合が最も少なかったが、満足度についてみると、両者とも他のイベントと比較すると両者の間に大きな違いはないように思われる。したがって今大会の動機に対する満足度が、今後の観戦意向に与える影響は少ないといえるのではないだろうか。

同行者数の項目では、テニスイベントにおいて同行者数1人とする回答が多く、平均値が他のイベントと比較すると低かった(図1-13)。一方、卓球および柔道イベントに観戦におとずれた者については、同行者数が多かった。これらのイベントで同行者数が多かった

要因としては、クラブや部活、道場等でまとまって来場した者が多かったことが考えられる。

自宅から会場までの時間について、ハンドボールでは30分以内とする回答が最も多く、次に30~60分、120分以上との回答が多かった(図1-14)。ハンドボール以外のイベントで最も多くの割合を占めたのは30~60分で、次に多かったのが60~90分という結果であった。また自宅から会場までの平均時間についてみると、テニスおよびハンドボールにおいて、平均時間が長いとの結果が得られた。ただし本研究で調査対象としたイベントのうち、ハンドボール以外のイベントが東京都内または横浜市内という首都圏で開催されたが、ハンドボールの大会会場は広島市内であった。このことが、ハンドボールイベントにおいて自宅から会場までの時間が長いという結果に影響を与えているものと考えられる。一方、テニスのイベントはハンドボールと異なり、東京都内で開催されていることから、このイベントを観戦するために遠方から足を運んでいる者が多い結果となった。

2) イベントごとの観戦者の特徴

(1) ハンドボール

上述したようにハンドボール観戦者の年齢については、各年代が同程度の割合で含まれていたが、性別ごとの各年代の分布をみると、20歳未満と50歳以上の男性および20代の女性が多く、40歳以上の女性は少ないことがわかる(図2-1)。

同一競技の国際大会の観戦回数について、0回と回答した者の割合が五つのイベントの中で最も高いことが図1-5より明らかとなったが、年齢と観戦回数との関係では、年齢が低い者ほど観戦回数が少ないという傾向がみとれる(図2-2)。

図1-6に示したとおり、大会に関する情報の入手時期は比較的遅く、1週間~1カ月前に情報を入手している観戦者が最も多かった。年齢と情報入手時期とのかわりについてみると、20歳未満の観戦者では大会の前日~1カ月前との回答が多く、1カ月以上前に情報を得ている者は極端に少なかった(図2-3)。

同一競技のプレー経験に関しては図1-7に示したように、このイベントの観戦者のうち、1年以上のプレー経験を有する者の割合が、他のイベントより少なかった。プレー経験と年齢との関係については、20歳未満のプレー経験者および50歳以上の未経験者が多く、20歳未満の未経験者、50歳以上の経験者は少なかった(図2-4)。プレー年数について、5年以上との回答の割合が他のイベントより少なかった点についても、プレー経験者に若年者が多いことによる影響であろう(図1-8)。これらの結果から、このイベントの観戦者の中には、20歳未満で部活動またはクラブ等で

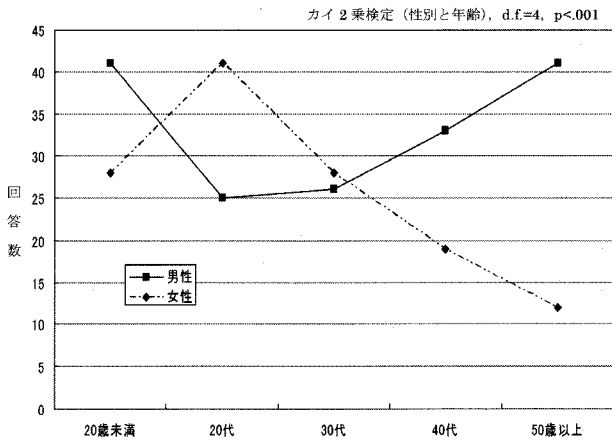


図 2-1 性別と年齢 (ハンドボール)

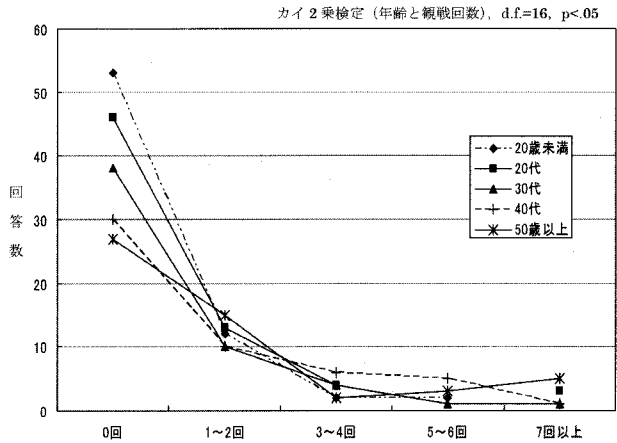


図 2-2 年齢と同一競技の国際大会の観戦回数 (ハンドボール)

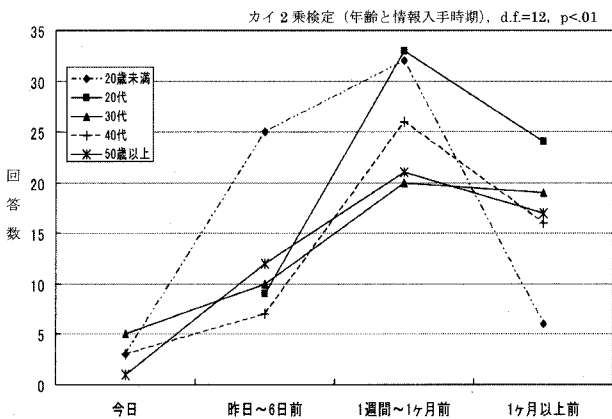


図 2-3 年齢と情報入手時期 (ハンドボール)

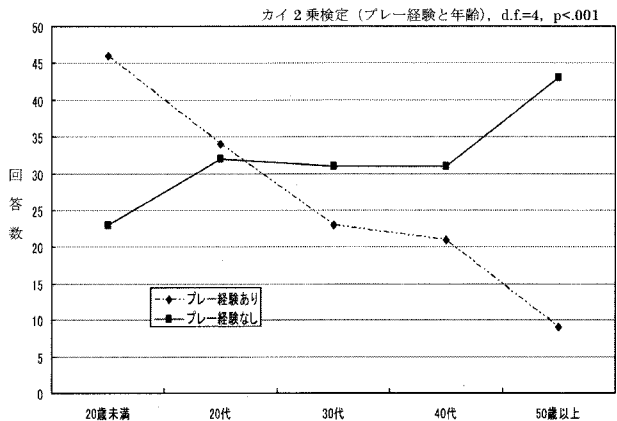


図 2-4 同一競技のプレー経験と年齢 (ハンドボール)

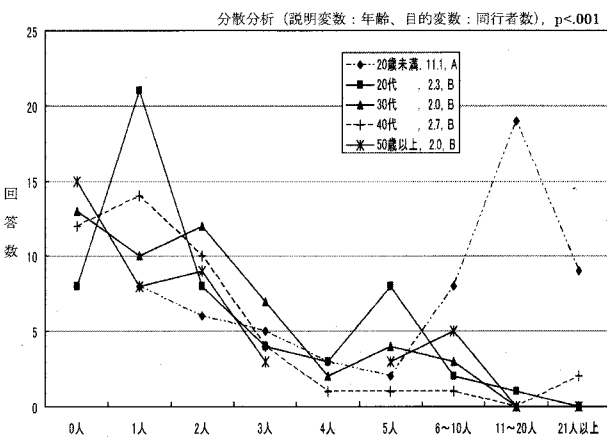


図 2-5 年齢と同行者数 (ハンドボール)

凡例内の数字は平均値 (人) を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

ハンドボールをプレーしている者が多いと考えられる。また 50 歳以上の観戦者については、プレー経験を有していない者が多い一方、他の年代と比較すると同一競技の観戦経験を有している者が多く (図 2-2)、ハンドボール観戦のリピーターとなっていることが示唆される。

同行者数に関して、年齢と同行者数との関係についてみると、20 歳未満の観戦者の多くは、6 人以上で観戦におとずれていた。また 20 代では同行者数 1 人との回答が最も多く、50 歳以上では 0 人が多かった (図 2-5)。この結果からも、20 歳未満の観戦者が部活動またはクラブ単位でおとずれており、50 歳以上の者が 1 人でハンドボール観戦を楽しみに来ている様子が見ええる。またこのイベントの観戦者の中に多かった 20 代の女性が、友人らと 2 人でおとずれていることが示唆される。

(2) ソフトボール

上述したようにソフトボール観戦者の年齢分布は、20 歳未満および 50 歳以上が多い U 字形となり、性別については、今回調査対象とした五つのイベントの中で唯一、半数以上が女性であった (図 1-1, 1-2)。年代分布を性別ごとに比較すると、20 歳未満の女性および 50 歳以上の男性が多くを占めていた (図 3-1)。

図 1-4 に示したとおり、異なる競技の観戦経験を有する者の割合は五つのイベントの中で最も高かったが、観戦経験と年齢との関係についてみると、最も多いのは 50 歳以上で観戦経験を有する者であった (図 3-2)。したがってこの大会の観戦者の中には、50 歳以

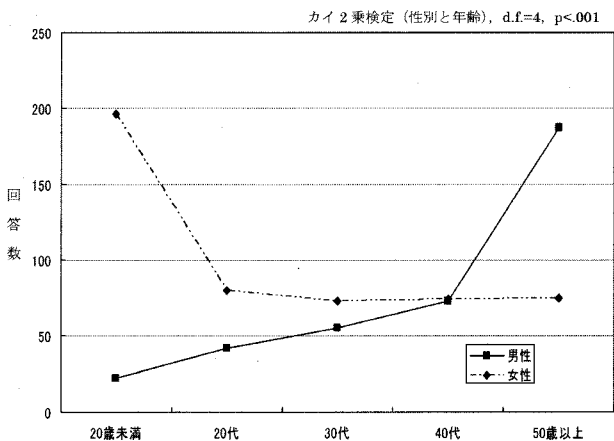


図 3-1 性別と年齢 (ソフトボール)

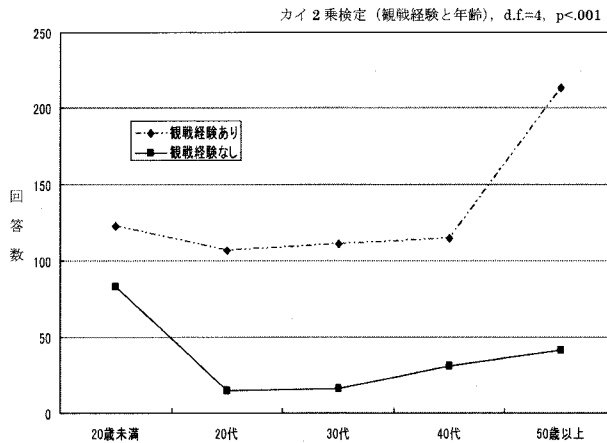


図 3-2 異なる競技の観戦経験と年齢 (ソフトボール)

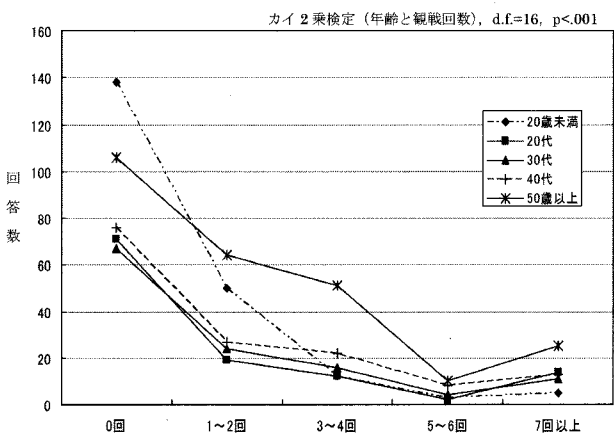


図 3-3 年齢と同一競技の国際大会の観戦回数 (ソフトボール)

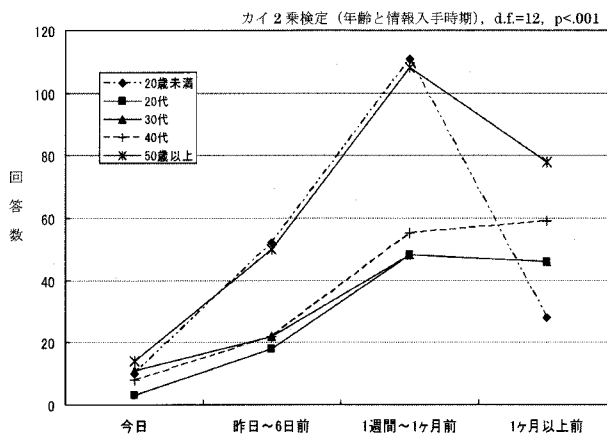


図 3-4 年齢と情報入手時期 (ソフトボール)

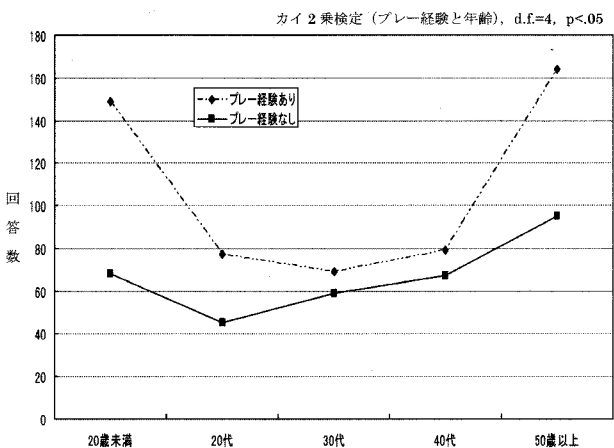


図 3-5 同一競技のプレー経験と年齢 (ソフトボール)

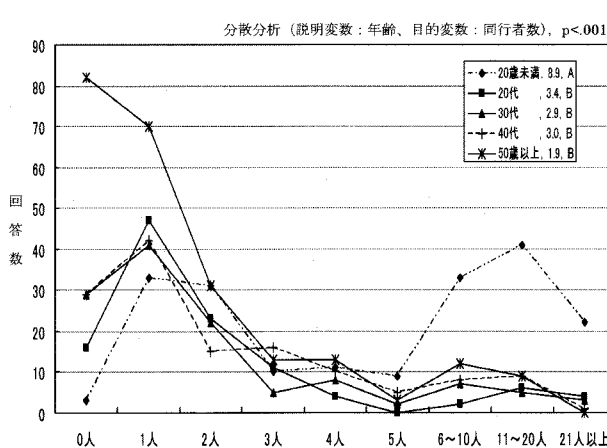


図 3-6 年齢と同行者数 (ソフトボール)

凡例内の数字は平均値 (人) を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

上でスポーツ観戦全般に関心の高い者が多く含まれているといえる。

同一競技の国際大会の観戦回数では、0回と回答した者が最も多かったが、年齢と観戦回数をクロス集計すると、20歳未満で観戦回数0回の者が多く、次いで50歳以上で観戦回数0回の者が多いことがわかった(図3-3)。一方、すべての年代で7回以上の観戦経験を有しているとの回答数が、5~6回との回答数を上回っていることから、ソフトボール観戦者の中には熱心なリピーターが一部、存在しているものと考えられる。

すでに述べたとおり、情報入手時期に関しては、ハンドボールと同様に入手時期が遅く、1週間~1カ月前に情報を入手している観戦者が最も多かった(図1-6)。年齢と情報入手時期との関係についても、20歳未満で1カ月以上前に情報を入手している観戦者が極端に少ないという、ハンドボールと同様の結果が得られた(図3-4)。

図3-5には、プレー経験の有無と年齢との関係を示した。図3-5のとおり、20歳未満および50歳以上でプレー経験を有する者が多く、この二つのグループが本大会の中心観戦者となっていたことがわかる。

同行者数について、年齢と同行者数との関係では、20歳未満の観戦者において、6人以上でおとずれている者が多かった。また50歳以上の観戦者では、0人との回答が最も多く、次いで1人との回答が多かった(図3-6)。したがってソフトボールにおいても、20歳未満の者が部活動やクラブ単位で観戦におとずれ、50歳以上の者が少数で観戦しているという様子がうかがえる。

(3) 卓球

卓球観戦者の性別は男女がほぼ半数ずつ、年齢は極端なU字型の分布であったが(図1-1, 1-2)、性別ごとの年齢分布をみると、20歳未満の男性および50歳以上

上の女性の観戦者が非常に多く、全体の約半数を占めており、大きな偏りがあることがわかる(図4-1)。

同一競技の国際大会の観戦回数は、0回と回答した者の割合が最も高く、以降、回数が多くなるにつれて割合が減少していく傾向がみられた。観戦回数を年代別にみると、20歳未満で初めて観戦におとずれた者が最も多く、50歳以上で観戦経験がない者が次に多かった(図4-2)。一方で図4-2に示したとおり、50歳以上の観戦者については、過去に卓球の国際大会観戦経験を有している者の数が、他の年代よりも多いとの結果が得られた。

図1-6で示したように、情報の入手時期に関して、最も多数であったのは、1カ月以上前に大会の情報を得た者であった。また年代ごとに情報の入手時期を比較すると、50歳以上では1カ月以上前に大会情報を入手した者が極端に多かった。一方、20歳未満においては、1週間~1カ月前に情報を入手した者の割合が、他の年代よりも比較的多く含まれていた(図4-3)。

上述したように、同一競技のプレー経験を有している者の割合は65%を超えており、テニスに次いで多かった(図1-7)。また同一競技の今後のプレー意向は高く、特に強い意向を示した観戦者が多かった(図1-9)。同一競技のプレー経験と今後のプレー意向との関係については、プレー経験があり、強いプレー意向を示す者が多かったが、プレー経験がない者の中でも、「少しプレーしたい」と回答した者よりも「非常にプレーしたい」と回答した者のほうが多かった(図4-4)。これらの結果から、今大会の観戦者と「するスポーツ」としての卓球との間の強い結びつきが想像できる。

観戦動機に関して、最も強い観戦動機として、鑑賞とほぼ同じ割合で学習と回答した観戦者が多かった点が、卓球における特徴であった(図1-11)。また同一競技のプレー経験と観戦動機とのかわりについてみる

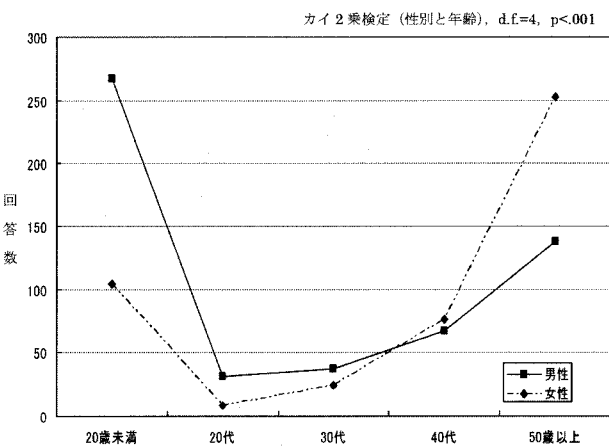


図4-1 性別と年齢(卓球)

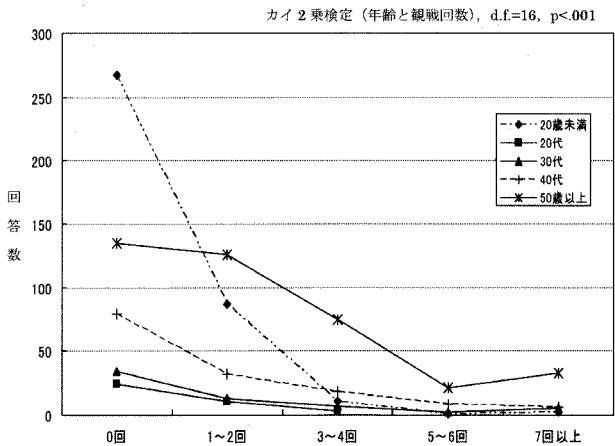


図4-2 年齢と同一競技の国際大会の観戦回数(卓球)

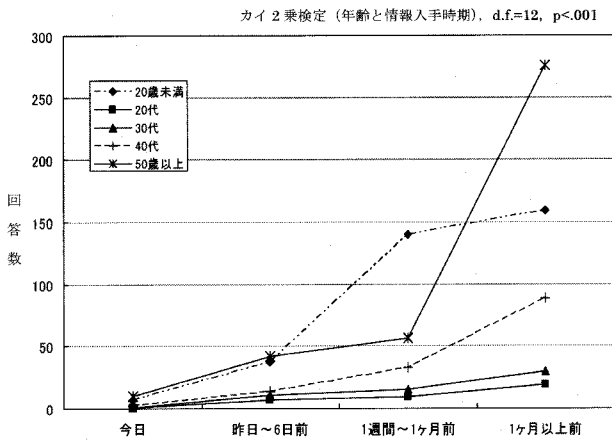


図 4-3 年齢と情報入手時期 (卓球)

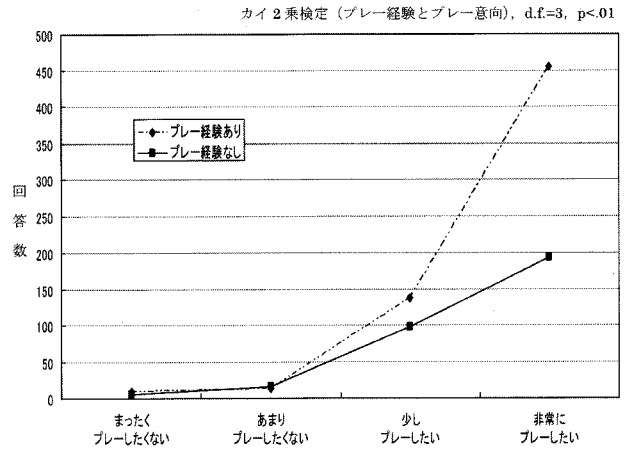


図 4-4 同一競技のプレー経験と今後のプレー意向 (卓球)

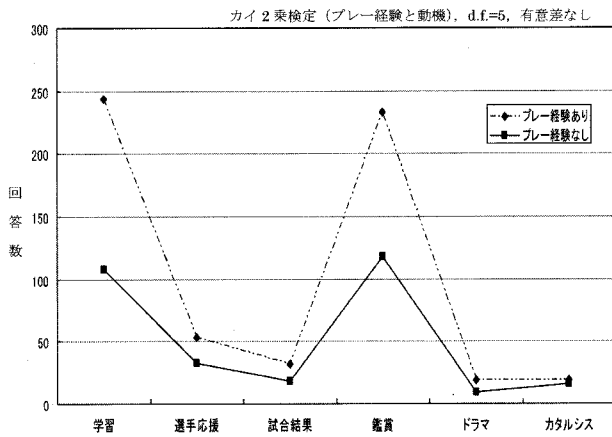


図 4-5 同一競技のプレー経験と動機 (卓球)

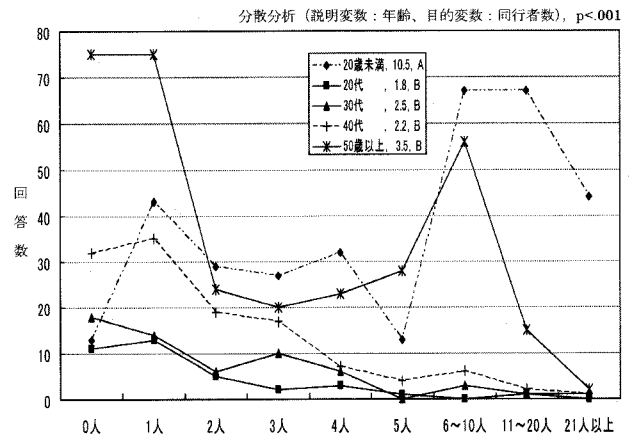


図 4-6 年齢と同行者数 (卓球)

凡例内の数字は平均値 (人) を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

と、プレー経験者の中では学習を最も強い観戦動機にあげた者が最も多かったが、未経験者においても、学習をあげた者の割合が高かった (図 4-5)。ここにおいても、多くの観戦者が卓球観戦を「するスポーツ」とのかかわりの中で捉えている側面が強いことが確認できる。

図 1-13 に示したとおり、同行者数に関して、1人および2人と回答した観戦者の割合は5イベント中最も低かったが、6人以上でおとずれている者が多く、同行者数の平均は高かった。年代ごとに同行者数をみると、20歳未満で6人以上の同行者との回答が多かったが、これは他のイベントにおいてもみられるように、部活動やクラブ単位での来場であると考えられる (図 4-6)。また 50 歳以上の観戦者において、同行者数 0 人および 1 人との回答に次いで、6~10 人の同行者と観戦におとずれた者が多かった点は、卓球の特徴といえる。この点に関しては、観戦者中に 50 歳以上でプレー経験を有する者が多かったことから、これらの人々が現在、卓球クラブに所属しており、クラ

ブの友人等とともに観戦におとずれた結果であると解釈できよう。

(4) テニス

テニスイベント観戦者の年齢分布は、5 イベントの中で唯一、30 代の観戦者が最も多く 20 代以下および 50 歳以上が少ない、山型となった (図 1-2)。年齢分布を性別ごとにみると、男女の 30 代の観戦者に次いで 20 歳未満の男性の観戦者が多いことがわかる。一方、20 歳未満の女性観戦者は、各年代の中で最も少なかった (図 5-1)。

上述したように観戦者のうち、異なる競技のプレー経験を有している者の割合は、他のイベントと比較すると最も高く、異なる競技の観戦経験があると回答した者の割合は、卓球に次いで低かった (図 1-3, 1-4)。したがってテニス観戦者の特徴の一つとして、「するスポーツ」全般への関心が高い一方、「みるスポーツ」とのかかわりは少ない人々が多いことが考えられる。

同一競技の国際大会の観戦回数について示した図 1-5 から、テニスイベントでは、最近 5~6 年間のうち

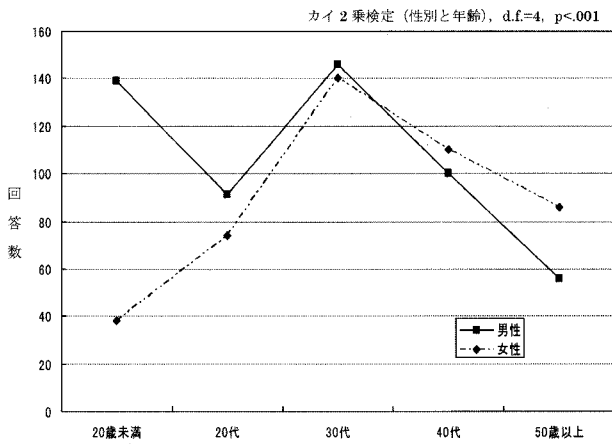


図 5-1 性別と年齢 (テニス)

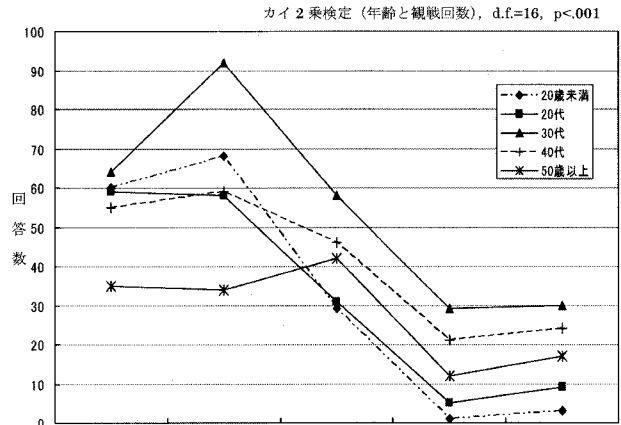


図 5-2 年齢と同一競技の国際大会の観戦回数 (テニス)

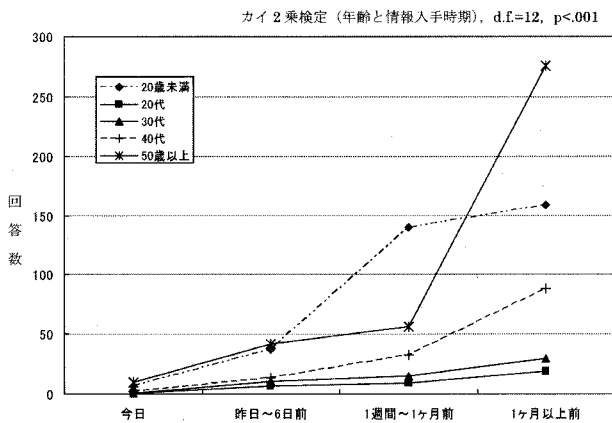


図 5-3 年齢と情報入手時期 (テニス)

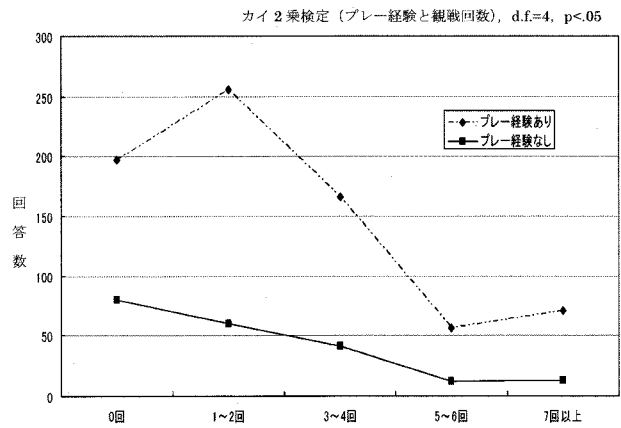


図 5-4 同一競技のプレー経験と観戦回数 (テニス)

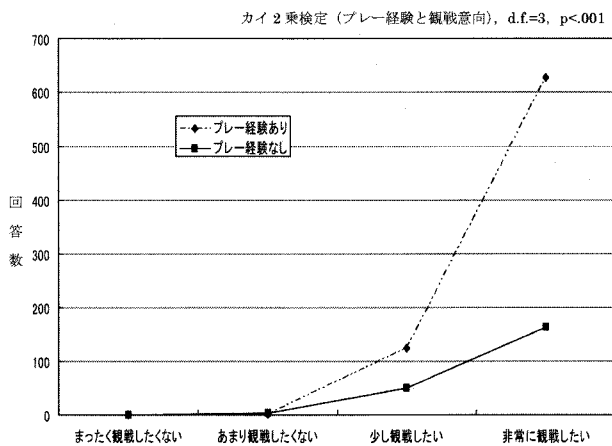


図 5-5 同一競技のプレー経験と今後の観戦意向 (テニス)

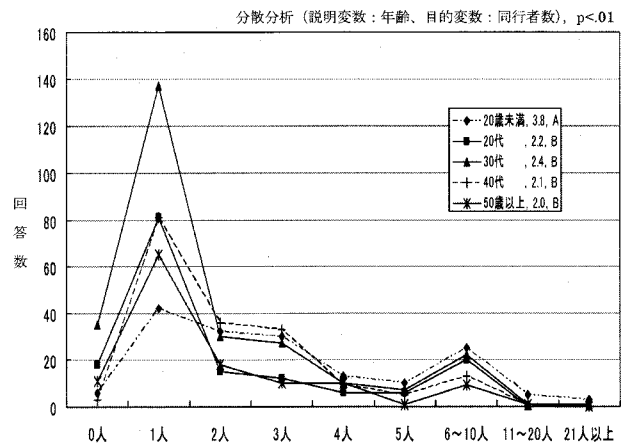


図 5-6 年齢と同行者数 (テニス)

凡例内の数字は平均値 (人) を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

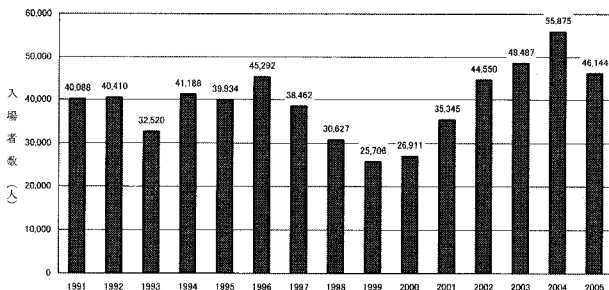


図 5-7 AIG OPEN 入場者数の推移
 (「AIG OPEN 2004 公式記録」財団法人日本テニス協会、2004 および日本テニス協会から提示された資料をもとに作成)

にリピーターを確保するようになったものと考えられたが、実際に図 5-7 に示したように、このイベントの入場者数は 2000 年以降、増加傾向にあり、2005 年では前年を下回ったものの、依然として高い入場者数を保っている。また年齢と観戦回数とをクロス集計すると、30 代で 1~2 回の観戦経験を有している者が観戦者中に最も多く、50 歳以上の観戦者では、これまでの観戦回数が 3~4 回との回答が最も多かった (図 5-2)。

図 1-6 に示したとおり、観戦者の情報入手時期は早く、前日~1 カ月前に情報を入手した者の割合が 5 イベント中最も低かったのに対し、1 カ月以上前に情報を得たと回答した者の割合は、5 イベント中最も高かった (図 1-6)。情報入手時期を年代ごとにみると、図 5-3 に示したように、20~40 代で 1 カ月以上前に情報を入手した者が多いことがわかる。

同一競技のプレー経験に関して、1 年以上のプレー経験を有する者の割合は 75% を超えており、五つのイベントの中で最も高かった (図 1-7)。プレー経験と観戦回数との関係については、プレー経験を有し、過去に 1~2 回観戦におとずれた経験がある者が最も多かった (図 5-4)。一方、プレー経験がない者では、過去の観戦回数 0 回と回答した者が最も多く、観戦回数が増すにつれて回答数が少なくなる傾向がみられた。またプレー経験と今後の観戦意向について示した図 5-5 をみると、プレー経験の有無によって今後の観戦に対する意向に違いがみられ、プレー経験がない者の観戦意向は経験者ほど高くない様子がかがえる。したがって上述したように、テニスイベントにおいてはリピーターが多いことが明らかとなったが、現時点でその多くはテニスのプレー経験を有する者であり、「するスポーツ」としてのテニスとのかかわりが少ない人々の間では「みるスポーツ」としてのテニスが、毎年足を運ぶイベントとして定着しているとはいえない。

最も強い観戦動機に対する満足度に関しては、他の

イベントと比較するとそれほど満足度が高い結果とはいえなかったが、同一競技の今後の観戦意向に関する項目では、最も強い意向を示した者が 5 イベント中最も高く、80% 以上であるとの結果が得られた (図 1-10, 1-12)。今大会において、最も強い観戦動機に対する満足度が決して高くなかったにもかかわらず、このように多くの観戦者が再びこのイベントをおとずれたいとの意向を示した背景として、大会会場においてさまざまな企画や催しが行われるなど、観戦者を楽しませるための仕掛けや工夫があったことをあげておきたい。

(5) 柔道

柔道観戦者の性別ごとの年齢分布では、20 歳未満の男性が非常に多く、50 歳以上の女性の割合が低いことが特徴的である (図 6-1)。

同一競技の国際大会の観戦回数については、0 回と回答した者が最も多く、以降、観戦回数が増すにつれて回答数が少なくなる傾向があった (図 1-5)。しかしながら回答の分布を他のイベントと比較すると、観戦回数 0 回の回答の割合は少なく、7 回以上の観戦経験があるとした割合が 5 イベント中最も高かった。観戦回数を年代ごとに比較すると、20 歳未満で観戦回数 0 回または 1~2 回という観戦者が多かった (図 6-2)。また 50 歳以上の観戦者では、7 回以上の観戦経験を有する者が最も多いとの結果が得られた。これらの結果から、柔道観戦者においては、若年で同一競技の観戦経験を有していないまたは少ない者が多い一方、50 歳以上を中心に、多数の観戦経験を有している熱心なファンが存在しているものと推測できる。

情報入手時期を年代ごとにみると、20 歳以下で 1 週間~1 カ月前に情報を入手した者の割合が、他の年代の傾向と比較すると高かった (図 6-3)。

柔道の経験と年齢とをクロス集計した結果、観戦者中に最も多いのは 20 歳未満で柔道の経験を有している者であり、次に 20 歳未満で経験がない者が多かった。また 30 歳以上の観戦者では、未経験者のほうが経験者の数を上回っていることが明らかとなった (図 6-4)。経験者について、経験年数とのかかわりをみると、柔道の経験者は他のスポーツと比べ長い経験年数を有している者が多いことがわかった。回答の分布は図 1-8 に示したとおり、1~3 年との回答が少なく、3 年以上の経験者の割合が五つのイベントの中で最も高いという、他のイベントと異なる傾向がみられた。

同一競技のプレー経験と観戦回数との関連について、プレー経験あり、なしともに観戦回数 7 回以上との回答数が、5~6 回との回答数を大きく上回った (図 6-5)。したがって、今大会の観戦者の中には、プレー経験の有無にかかわらず、熱心な柔道観戦のファンが

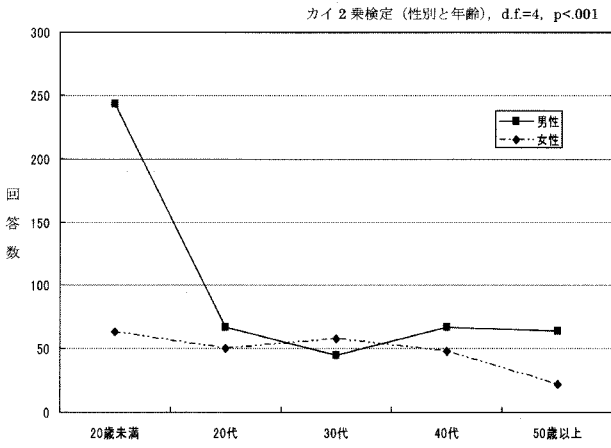


図 6-1 性別と年齢 (柔道)

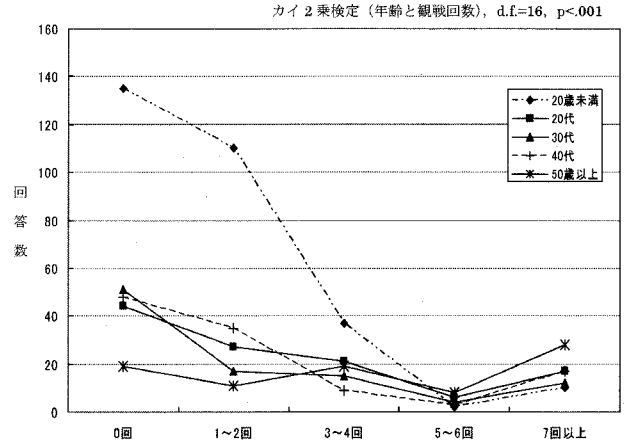


図 6-2 年齢と同一競技の国際大会の観戦回数 (柔道)

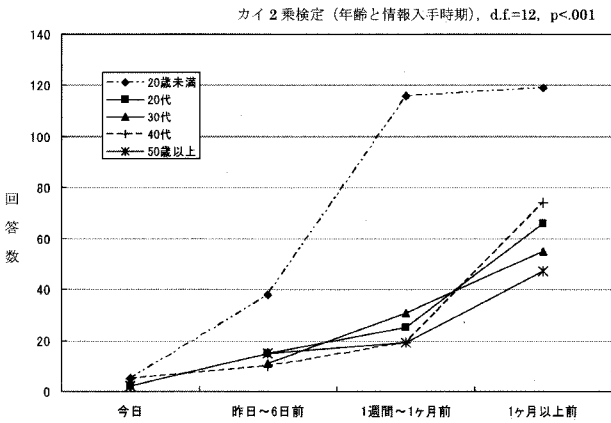


図 6-3 年齢と情報入手時期 (柔道)

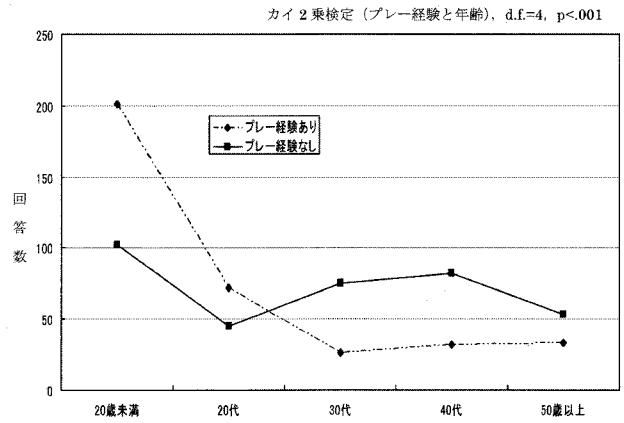


図 6-4 同一競技のプレー経験と年齢 (柔道)

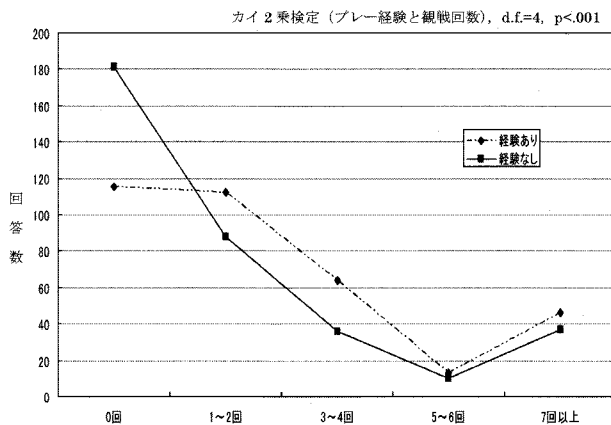


図 6-5 同一競技のプレー経験と観戦回数 (柔道)

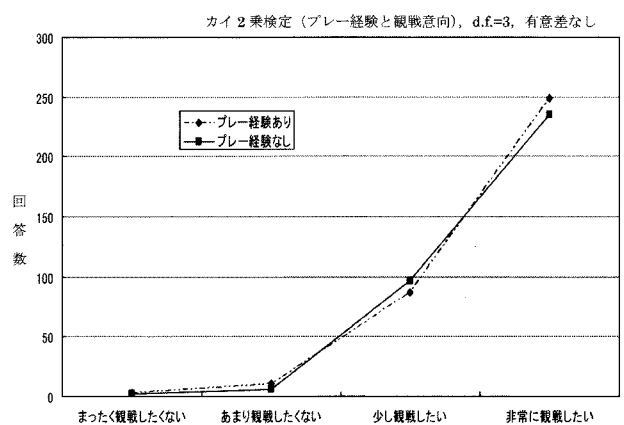


図 6-6 同一競技のプレー経験と今後の観戦意向 (柔道)

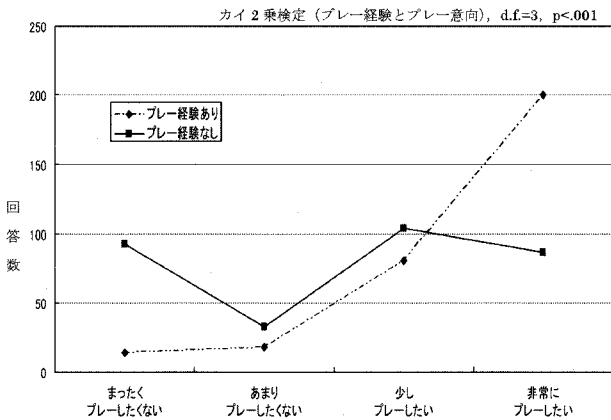


図 6-7 同一競技のプレー経験と今後のプレー意向 (柔道)

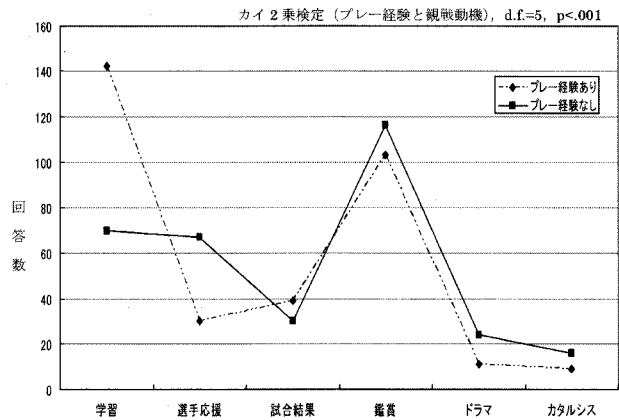


図 6-8 同一競技のプレー経験と最も強い観戦動機 (柔道)

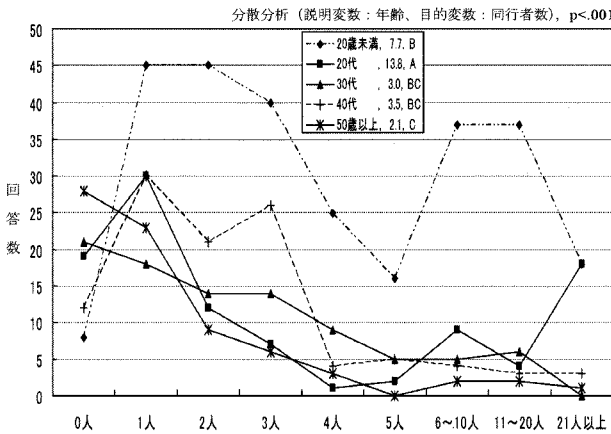


図 6-9 年齢と同行者数 (柔道)

凡例内の数字は平均値 (人) を表す。またアルファベットは多重比較の結果を表しており、同じ文字でつながっていない水準間には有意差があることを示している。

存在することが示唆される。また図 6-5 より、観戦経験 0 回と回答した者の中には、柔道未経験者が経験者よりも多いことがわかる。一方、プレー経験と今後の観戦意向について示した図 6-6 をみると、柔道経験がある者もない者も、ほぼ同じように今後の観戦意向が高い様子がうかがえる。

同一競技の今後のプレー意向に関して、柔道の経験とプレー意向との関係を図 6-7 に示した。図 6-7 より、柔道の未経験者のほうが経験者よりも今後のプレー意向が低いことがわかる。特に未経験者において、「まったくしたくない」という強い否定の意思を示した者が、「あまりしたくない」と回答した者よりも多かった点は特徴的である。

最も強い観戦動機をみると、卓球と同様に鑑賞が比較的少なく、学習が多く (図 1-11)、選手応援が多かった点が柔道の特徴であった。観戦動機と柔道の経験とのかわりについては、柔道経験者で学習を最も強い観戦動機としてあげた者が、最も多かった。また選手応援に関しては、柔道未経験者で選手応援をあげた者

が多かった (図 6-8)。

以上で述べたように、柔道未経験者は今後のプレー意向が低い一方で観戦意向が高く、最も強い観戦動機として選手応援をあげた者の割合が、経験者に比べ高かった。このことから、柔道においてはプレー経験者でなくても、特定の選手を応援するなど柔道の試合をみることで楽しまれており、観戦行動が「するスポーツ」の延長としてではなく、「みるスポーツ」の対象として捉えられる傾向にあるといえるだろう。

図 1-13 に示したように、柔道観戦者の同行者数は多く、他のイベントと比較すると 21 人以上でおとずれている者の割合が高かった。年代別に同行者数をみると、20 歳未満で 6 人以上のグループで観戦におとずれている者が多かったことがわかる (図 6-9)。これは部活動または道場単位でおとずれているためである。

4. 結 論

本研究では、国際スポーツイベントの観戦者に関する基礎的資料を得ることを目的として、2005 年度中に国内で開催された五つの国際スポーツイベントを事例としてとりあげ、各イベントの観戦者に関して、基礎的な属性およびスポーツとのかかわり、観戦行動について考察した。

本研究の結果、対象とした国際イベントにおいて、多くの観戦者に関する基礎的な資料が得られた。本研究の結果得られた観戦者に関する基礎的資料をもとに、「するスポーツ」および「みるスポーツ」とのかかわりを中心に各イベント観戦者の特徴をまとめると、次のとおりである。

ハンドボールのイベントについて、観戦者の中には、部活動やクラブ等で「するスポーツ」としてのハンドボール経験を有する、20 歳未満の若者が多く含まれていた。また 2 人で観戦におとずれた 20 代の女性が多い点と、「するスポーツ」よりも「みるスポー

ツ』としてのハンドボールとのかかわりが強い、1人で来場した50歳以上の男性が多い点が、特徴としてあげられる。

ソフトボールでは、観戦者の中に、部活動やクラブ等での「するスポーツ」としてのソフトボール経験を有する、20歳未満の女性が多かった。またソフトボールのプレー経験を有し、「みるスポーツ」全般に興味がある50歳以上の男性が多いとの結果が得られた。

卓球では、部活動やクラブ等で「するスポーツ」としての卓球の経験を有するが、「みるスポーツ」としての卓球の観戦経験は少ない、20歳未満の男性の割合が多かった。また卓球のプレー経験を有し、クラブの友人らと観戦におとずれた50歳以上の女性が多い点は、他のイベントと異なる特徴といえよう。観戦者の多くは「するスポーツ」、「みるスポーツ」ともに他の競技への関心が低く、「するスポーツ」としての卓球のために学習することを主な観戦動機としていることが、明らかとなった。

テニスの観戦者の中には、「するスポーツ」としてのテニス経験を有し、近年続けて観戦におとずれている、30代の男女および20歳未満の男性が多く含まれていた。また「するスポーツ」への関心が高いが「みるスポーツ」への関心は高くなく、部活動やクラブ単位ではなく友人らと少人数で観戦におとずれた、このイベントの観戦のために遠方からおとずれた、といった特徴を有する者が多いことが明らかとなった。

柔道の国際大会では、部活動や道場等で「するスポーツ」としての柔道の経験を有するが、「みるスポーツ」としての経験は多くない20歳未満の男性が多かった。またこれらの観戦者は、学習動機が強いことが明らかとなった。一方、「するスポーツ」としての柔道の経験はなく、今後のプレー意向も低い、選手応援を動機として「みるスポーツ」としての柔道を楽しんでいる者も多く含まれていた。これらの観戦者は、今後の観戦意向が高かった。また50歳以上で、柔道の観戦に数多く足を運んでいる熱心なファンも、観戦者中に多く含まれていた。

以上の結果を国際スポーツイベントのマーケティングという視点から比較すると、観戦者の特性について次にあげる3通りの組み合わせを検討することで、観戦者の特徴が理解され、イベントの差別化・類型化が可能となってくるものといえる。

- (1) 性別と年齢と同一競技のプレー経験
- (2) 同一競技の「するスポーツ」と「みるスポーツ」の経験
- (3) 「するスポーツ」と「みるスポーツ」全般への興味

本研究によって観戦者に関する基礎的資料が得られ

たことで、国際スポーツイベントにおける課題として、観戦者の動機を満足させているにもかかわらずリピーターを確保できていない、「するスポーツ」とのかかわりが強いが「みるスポーツ」として確立されていない、という2点が浮かびあがってきた。今後は、これらの課題を解消しようとするようなスポーツイベントのマーケティングおよびマネジメント戦略について、具体的に検討していかねばならない。

また繰り返し述べているとおり、スポーツマーケティングの分野では現在、理論構築に向けた実証的なデータを積み重ねている段階にある。したがって今後、さらに多くの事例を積み重ねることで、競技種目、大会の種類（国内のリーグ戦と国際イベント等）や規模、開催地による特徴を明らかにし、多くの人々におとずれてもらうためのマーケティング戦略を開発していくことが必要である。なお本研究において、大会に関する情報の入手時期について、広報活動との関連を調査し詳細な検討を加えるには至らなかった点も、今後の課題としてあげておかなければならない。

注記および引用参考文献

- 1) 本研究において「みるスポーツ」とは、佐伯の考えに依拠し、「ゲームをみる（観戦する、鑑賞することによってスポーツを楽しむスポーツ享受の一つのスタイル）」であり、「『みる』という行為によってスポーツを享受すること、『スポーツをみて楽しむ行為そのもの』」を示すものとする（佐伯聰夫：「スポーツ文化としての『みるスポーツ』」。文部省競技スポーツ研究会編：『「みるスポーツ」の振興』。ベースボール・マガジン社、pp. 12-13, 1996）。
- 2) 藤本淳也、原田宗彦、松岡宏高：プロスポーツ観戦回数に影響を及ぼす要因に関する研究—特に、プロ野球のチーム・ロイヤルティに注目して—。大阪体育大学紀要、27, 51-62, 1996。
- 3) 高橋豪仁：サンフレッチェ広島ホームゲーム観戦回数の要因に関する研究。スポーツ産業学研究、6(1), 7-19, 1996。
- 4) 藤本淳也、原田宗彦：潜在的観戦者のマーケット・セグメンテーションに関する研究—特に観戦意図に着目して—。大阪体育大学紀要、32, 1-11, 2001。
- 5) 原田尚幸、三浦嘉久、宮田和信：プロ野球本拠住民の観戦意図に影響を及ぼす要因。鹿屋体育大学学術研究紀要、20, 65-71, 1998。
- 6) 松岡宏高、原田宗彦、藤本淳也：プロスポーツ観戦者の誘致距離に関する研究。大阪体育大学紀要、27, 63-70, 1996。
- 7) 池田克紀ほか3名：スポーツ消費行動の社会心理的要因。東京学芸大学紀要、36, 133-145, 1984。
- 8) 川口晋一：「テレビのスポーツ中継視聴者の充足様態に関する研究—プロ野球中継および高校野球中継視聴者の野球経験による比較—」。体育・ス

- スポーツ社会学研究会編：『体育・スポーツ社会学研究9』。道和書院，79-99，1990。
- 9) 齊藤隆志：観戦行動の分類と要因—スポーツイベント経営の視点から—。筑波大学体育科学系紀要，14，39-53，1991。
 - 10) 藤善尚憲：スポーツファンに関する心理学的研究—プロ野球スペクテイターの行動分析—。天理大学学報，176，1-12，1994。
 - 11) 原田宗彦，藤本淳也，内海俊朗：スポーツの観戦行動に関する研究—カレッジ・スポーツと観戦者としての女子大生について—。大阪体育大学紀要，23，39-45，1992。
 - 12) 藤本淳也，原田宗彦：レジャー消費活動としてのスポーツ観戦に関する研究—特に，女子大生のプロスポーツ観戦に注目して—。Leisure & Recreation—自由時間研究，12，4-15，1992。
 - 13) 小野里真弓，畑 攻：WJBL（バスケットボール女子日本リーグ機構）の観戦者特性に関する基礎的研究。日本女子体育大学紀要，33，41-47，2003。
 - 14) 仲澤 眞ほか5名：Jリーグの女性観戦者に関する研究。スポーツ産業学研究，10(1)，45-57，2000。
 - 15) 今日のスポーツイベントにおいて，企業や行政との結びつきが中心に据えられがちな現状に対し松田は，「祭りがビジネスに結びついていけないといっているのではない。それはあくまで間接的，マージナルであるべきで，直接的，センターであってはならない」と指摘している（松田義幸：イベントとは何か。健康と体力，22(2)，6，1990）。
 - 16) 文化的価値に焦点をあてた理論構築の必要性について，柳沢は以下のように述べている（柳沢和雄：スポーツ産業の成熟とスポーツマネジメント研究の課題。スポーツ産業学研究，11，10-11，2001）。
- 「個別産業及び個別課題の検討に際しては，スポーツを行うにせよ観戦・視聴するにせよ，スポーツそのものの文化化や生活化に関連づけられて理論構築がなされなければならない。例えば，経済的利潤は個別スポーツ産業研究の価値前提となるものの，いうまでもなく経済的利潤自体は国民のスポーツ行動やスポーツライフスタイルの成熟を基底とするからである。スポーツ産業の成熟やスポーツマネジメント研究の理論構築はまさにこの点，すなわちスポーツの文化的価値の増殖とその価値に支えられたスポーツ行動とスポーツライフスタイルの創造に関連づけられたものでなければならないと思う。」
- 17) 佐伯によれば「みるスポーツ」とは，「スポーツをみる」という現象とは異なり，「『みるスポーツ』享受のために『みせるスポーツ』を意図的に提供するものとして展開する意図的・計画的・組織的に仕掛けられたメディア装置の構造の中で『みることによるスポーツ』を享受するもの」である（佐伯聰夫：前掲書，pp. 52-53）。この佐伯の考えに基づき，本研究では調査対象を選定するにあたり，「みせるスポーツ」を提供するための構造的仕掛けが用意されていることを条件の一つとした。
 - 18) 各競技団体は国内における競技の普及および振興を掲げている。したがってこれらの団体の活動の一環である国際大会は，当然，その目的のもとに行われているものといえる。